バフィの疑似体験

ｆｅｍｃｉｒｃ－ｆａｎ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

　このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
　バフィの疑似体験

【Ｎコード】
Ｎ６６６６ＢＷ

【作者名】
ｆｅｍｃｉｒｃ－ｆａｎ

【あらすじ】
　エジプトでＦＧＭ（女性器切除）の取材をしていた女性ジャーナリストの悲劇。

（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

バフィ・ランバート――彼女は、世界的なネットワークを持つ通信社に記事を提供するフリーのジャーナリストだ。そのすらりとした長身と豊かな胸と腰回り、そして、長い金髪と知性的な美貌は、ファッションモデルも顔負けだった。

今、バフィはエジプトで女性割礼について取材している最中だった。日中のうだるような暑さも砂埃が舞っているような乾燥した空気も気密性が高い冷房の効いた高級ホテルの中ではまったく気にならなかった。さらに部屋にはノートパソコンが接続できるＬＡＮ端子も備え付けられていた。

検索エンジンで女性割礼について調べたバフィは、そのあまりにも酷い内容にゾッとさせられた。イスラム圏諸国において、女性の外性器の一部を麻酔を使わずに切除する風習が女性割礼であり、その野蛮な慣習は、近年においては『女性器切除（ＦＧＭ）』と定義され、国際的には禁止の方向に向かっていた。

今、バフィが滞在しているエジプトでも表向きは法律によって『女性器切除』が禁止されていたが、実際には、この女性割礼はまだ続けられており、毎年、数多くの女性たちが外性器を切り刻まれていた。

バフィは、女性割礼という悪習に対して嫌悪感を抱く一方、少なからず興味も引かれていた。いったい、どんな人間が女性に対して割礼を施すのか知りたいと思ったのだ。同時に、女性たちを〝切る〟変質者の実態についての、国際的な暴露記事を書こうとも決意していた。

とりあえず、バフィは、女性に対して非合法な割礼手術を行っている者を探しだすことから始めた。そして、幸運なことに、カイロで重用していた情報屋のおかげで、思っていたよりも早く、床屋を隠れ蓑にして女性割礼を行っているムスタフという男を見つけだすことができた。

バフィは、すぐさま、ムスタフのもとに向かうと、インタビューするための代金を支払い、取材の段取りを整えた。彼は細面に灰色

がかった髭をたくわえた五十がらみの小柄な男で、彼のターバンを巻いた頭のてっぺんがバフィの目線と同じくらいだった。その雰囲気も温厚そうで、女性を“切る”という野蛮なイメージは感じられなかった。

　実際に会うまでは、どんな陰険な人間なのだろうと身構えていたバフィは、思わず気が抜けてしまった。それでも彼女は、最も気にかかっていたことを最初に尋ねた

「割礼される女性たちは、耐え難い苦痛を受けることになるんじゃなくて？」

　しかし、ムスタフの返答は、「俺にゃ、わからねぇこったな。女の苦痛なんてぇ、俺にとっちゃ、なんの意味もねぇしよ」というものだった。その彼の捉えどころのない返答に、バフィの好奇心が疼いた。彼女は、彼に対して「割礼を疑似体験させてもらえないかしら？」と頼みこんでいた。

　バフィは、レズビアンの恋人からクンニリングスされる度に、とても素敵な快感を得ていたので陰核を失いたくはなかった。しかし、それを失うかもしれないという妄想に対して異常な興奮も覚えていた。

　唐突なバフィの依頼に対しても、ムスタフは気軽に応じた。

「んじゃ、こっち来て、下を全部脱いで、それぇに座ってくれぇ」

　ムスタフに続いて隣の部屋に入ったバフィは、雑然とした室内の真ん中に置かれている古めかしい床屋椅子を見て驚いた。

(まさか、ここで――この椅子で割礼を施すっていうの？)

　彼女がムスタフを見ると、彼は黙って頷いて視線で床屋椅子を指し示した。

(なんて原始的なのかしら……)

　もちろん、建物の外観を見ているバフィは、きちんとした手術室があるとは思っていなかったが、診察室らしい部屋と婦人科検診台のような椅子くらいはあると思っていたのだ。

　それでも意を決したバフィは、ドキドキしながらスカートとパン

ティを脱いで床屋椅子に座った。すると、ムスタフは、黙ったまま彼女が身動きできないように革紐で椅子に縛りつけた。
「まんずは、その毛を剃らねぇとな」
そう言ったムスタフは、いつの間に準備したのか、バフィの明るい綿毛で覆われた下腹部にシェービングクリームをまぶすと、そっと剃刀をあてがった。そして、一本のむだ毛も残さないというような丁寧さで、慎重に剃毛し始めた。
一方、バフィは、床屋椅子に革紐で結びつけられ、自分の腕や脚、さらに体がまったく動かすことができない状況に対して、わずかばかりの性的な快楽を感じていた。そのうえ、股間に触れるムスタフのざらざらした指の動きは、とても卑猥な接し方で、彼女の性感を否応もなく高めていった。
バフィの陰核は、先端部が包皮から突出するほど硬く勃起し、小陰唇も陰裂からはみだすように大きく膨らんでいた。彼女は、このまま絶頂を極めたかったが、ムスタフは、その途中で、手を止めてしまった。
「俺は、女たちを切るめぇにゃ、いっつも小便させぇとくんだ。小便はきたねぇからよ、切ってる最中に漏らされて、ひっかけられたくねぇんだ」
そう説明したムスタフは、バフィに向かって尋ねた。
「おめぇさんも小便してぇかい？」
バフィは、耐え難い性感の高まりに翻弄されていて、我を忘れたように「そう、そうよ」とただ繰り返すだけだった。
ムスタフは、バフィの大陰唇を大きく広げると、尿道口がある膣前庭を露出させた。さらに見かけによらず器用な手つきで尿道カテーテルを挿入していった。すると同時に黄色の安定した流れが細いチューブの中を満たし、末端のビニール袋が少しずつ膨らんでいった。
バフィは、尿道での何とも言い難い微妙な感覚と小陰唇や陰核に加え続けられるムスタフの手慣れた愛撫によって、さらに性感が高まるのを感じた。彼女はイク寸前に達していたが、そのためには、

あと僅かな刺激がさらに必要だった。
「もっと、もっと、もっと強く！」
激しい喘ぎ声を出しつつ、バフィは長い金髪を振り乱して大きく叫んだ。
「もっと、もっとしてちょうだいーっ！！」
しかし、ムスタフは、そんなバフィに対して、いきなり彼女の外性器に氷嚢を押し当てた——否、そのような感覚を与えた。実際には、冷たい液状のものを全体的に塗布しただけだった。彼女は、そのひんやりとしたスースーする感覚によって自分の性感が急激に衰えていくのを感じた。
「消毒液だ。これをしておかねぇと、病気になっからな」
ムスタフは、そんなことを言いながら、ごそごそと引き出しから何かを取り出していた。その直後、バフィが感じたものは、自身の勃起しきっていた陰核を針で——否、赤く灼熱した錐で突き刺されるような感覚だった！　あまりの激痛に、一瞬、頭の中が真っ白になる！！　彼女の性的な興奮は、完全に消し飛んでしまった。
いったい、ムスタフは、何をしたのか……！？　涙で霞む目で自分の股間を覗きこんだバフィが見たものは……！！
（ああっ、なんてことを！）
ムスタフは、歯科医が使うような先の尖ったピック状の珍妙な道具で、彼女の陰核を縦にまっすぐ貫いていたのだ。
バフィは、即座に理解した——今、自分がムスタフによって陰核切除術の疑似体験を与えられているということを！
（ああーっ、これがクリトリスを切り取られる苦痛なのね）
オルガズムに達することはできなかったが、割礼の苦痛を直に体験できただけでも十分だった。バフィは、ムスタフに対して「ありがとう。十分に参考になったわ」と言って、彼が革紐を解くのを待った。しかし、彼女の革紐が解かれることはなかった。
「アクメッド、そろそろ本番、始めぇぞっ」
ムスタフがそう叫ぶと、突然、大柄でがっしりとした体格の、二

十歳くらいの男が部屋の中に入ってきた。
「何っ！？　誰？　どういうことなの！？」
　バフィは、狼狽して叫んだ。
「こいつぁは、俺の弟子のアクメッドだ」
　そう言いながら、ムスタフは、バフィの陰核に深々と突き刺したピック状の道具をまっすぐに引っぱり上げ、その柄を弟子のアクメッドに持たせた。その陰核を引き千切られるような苦痛に、彼女は思わず悲鳴をあげた。
「い…、痛いわ。やめてちょうだい！　引っぱらないで！！」
　この危機的状況から逃れようと、バフィは床屋椅子の上で激しく暴れたが、その抵抗も手足と胴をしっかりと縛りつけられていたため、無駄な努力で終わった。
「紐を解いてちょうだい！　私を自由にして！！」
　アクメッドはピックの柄をいきなりグイッと捻って、大声で喚くバフィに対し、彼女の陰核を通じて、その中枢神経へ苦痛を送り込んだ。
「ぎゃあああーっ！！」
　先ほど感じた以上の激しい痛みに、バフィは全身を強ばらせて金切り声を上げた。
「おめぇさんは知りたがってぇたよな。それに、俺に金さ払ってぇくれたよな。ムスタフは、格安で信用一番ってな！　まあ、手早くすまっしてやっからよ、ちぃとおとなしくしてろや」
　悲鳴を上げていたせいで、バフィは、ムスタフが話している内容をほとんど聞き取ることができなかったが、彼が床屋椅子に横付けされたテーブル上のトレイで外科用メスや外科用鋏類を並べていることに気づき、彼女は言い知れぬ不安に襲われ、心臓が早鐘のように打ち始めていた。
（まさか……本当に……するつもりじゃ……）
　割礼への恐怖に顔を青ざめさせているバフィのそんな心情をよそに、ひととおりの準備を終えたムスタフは、彼女の股間に向き合う

ように立つと、いきなり左の小陰唇を人差し指と親指で摘み、グイッと引っぱって右左に何度か捲り返す。その部分に真剣な眼差しを注いでいた彼は、納得顔でモゴモゴと小さく呟いた。
そして――。
「んじゃ始めっとすっか」
そう言いながら、空いている右手で外科用鋏を取り上げた。
ムスタフの様子から、本当に割礼されるかもしれないと自覚したバフィは、再び床屋椅子の上で必死に足掻き始めた。
「や…、やめてちょうだい！　お願いよ！！」
「割礼は疑似体験するだけでいいの！　本当にしない――」
バフィが大声で叫ぶと同時に、アクメッドは、彼女の陰核に突き刺さったままのピックを前回よりも激しく捻って、二度目の、そして、より苛烈な懲罰を与えた。
「――うぎゃあぁーっ！」
彼女は、しっかりと縛りつけられた床屋椅子の上で体を大きく仰け反るようにして人間離れした絶叫を張り上げる。まさに陰核を切り落とされたのではないかと思えるような苛烈な痛みだった。
ムスタフは、それまでのバフィの懇願などまるで聞いていなかったかのように、引き伸ばした小陰唇の付け根に外科用鋏をギュッと押し当てると、おもむろに下方から上方に向けて切り進み始めた。
「うぅぎゃあああぁ――っ！！」
瞬時に、これまでのものなどとは比べものにならない灼けつくような激痛がバフィの股間を襲う。外科用鋏が肉襞を断つたびに生じる断続的な痛みは耐え難いものだった。彼女は、喉が裂けんばかりにつんざくような悲鳴を上げ続けていた。すでに何も考えられなかった。
その外科用鋏によるカットが最上部にまで達すると、バフィの左の小陰唇は、かろうじて上端部のみで陰核亀頭に繋がっているだけとなった。
ムスタフは、バフィの出血を抑えるために傷口に硝酸銀を擦り込

んだ。それから、彼は右の小陰唇でも同じ手順を素早く繰り返した。彼女の上げ続ける叫び声は、早くも嗄れたものになり始めていて、まるで獣の唸り声のようだった。だが、彼女にとって、本当の地獄は、まだ、これからだった。
　バフィの左右両方の小陰唇を陰核亀頭からぶら下がるだけの状態にしたムスタフは、外科用鋏をテーブル上のトレイに戻すと、そのしわだらけの顔に凶悪な笑みを浮かべて、弟子の方へ振り返った。
「よお、アクメッド。ここから、おめぇがやってみっか？」
「本当にやらしてくれんのか、親方？」
　割礼手術の助手であり、ムスタフの弟子でもある大男は、浅黒い顔いっぱいに歓喜の表情を露わにした。
「ああ、おめぇも、そろそろ独り立ちしてもいいころあいだろう。おめぇの腕前を俺に見してみろ」
　バフィの陰核を突き刺しているピックの柄を師匠に手渡したアクメッドは、嬉々としてトレイから外科用メスを取り上げると、見た目に似合わぬ器用さで陰核包皮の周囲に逆U字形の切れ目を入れた。
「あああーっ！」
　最も感覚が敏感な部分で瞬間的な生じた鋭い痛みに、バフィは再び悲鳴を上げた。小陰唇を外科用鋏で切断されたときに比べれば、その痛みはずいぶんと小さなものだったが、陰核の周辺を傷つけられた恐怖は計り知れなかった。
　アクメッドは、バフィの体から切り離した薄皮を手際よく引き剥がすと、近くの廃棄物用のバケツに投げ込んだ。包皮が失われ、露わになったピンク色の陰核亀頭の付け根あたりには、やはり若干の出血が見られたが、彼は少量の硝酸塩を擦り込むことによって、それも素早く止血した。
　あまりの出来事に茫然自失となっていたバフィは、心臓の鼓動と重なるように股間を襲う断続的な鋭い痛みに耐えきれず、ぼろぼろと涙を零しながら、「痛い！　痛いっ！！」と泣き声をあげていた。
　そんなバフィに対して、ムスタフは嘲笑を浮かべながら言った。

「女の苦痛なんて、俺にとっちゃ、なんの意味もねぇ！」
それから、彼は年若い弟子に目を向けた。
意欲満々のアクメッドは、ミニチュアの熊手のような先端部が直角に曲がって三つに分岐している歯科用ピックに似た形状の器具を手にしながら、自分自身が初めて行う陰核切除術を再開したがっていた。
「えぇぇぞ、続けてぇも」
師匠の許可を得たアクメッドは、ピックのフォーク状となっている先端部を保護する覆いを奪われて剥き身となった陰核亀頭の付け根にきつく突き立てた。
「うぎあっ！」
包皮を切り取られたばかりの傷口を鋭いピックで突き刺されたバフィは、甲高い悲鳴をあげて床屋椅子の上で激しく悶え苦しんだ。
そして、その二本目のピックをアクメッドから受け取ったムスタフは、先に手渡されたピックとバフィの小陰唇を一緒に握り締めると、それらを同時にギュッと引っぱり上げた。
「うぎあーっ！　や…、やめてーっ！！」
その部分を引き千切られるような恐ろしいほどの苦痛に、バフィは縛りつけられた床屋椅子から逃れようと身を大きくよじらせて暴れた。今、彼女は自分の陰核が切り取られる寸前であることを絶望的な恐怖感とともに確信していた。
「お…、お願い……。切らないで……！！」
アクメッドは、そんなバフィの懇願にもまったく耳を貸さず、外科用メスを再びトレイから取り上げると、西欧人女性の体から淫魔に取り憑かれた器官を摘出するための最終段階を開始した。
師匠の手によって長く引き伸ばされている肉芽の根本へ、弟子が突き刺さした外科用メスの冷たい切っ先は、瞬時に灼熱の刃と化す。
そして、割礼の疑似体験だけを求めていた女性ジャーナリストは自らの股間で爆発的に生じた痛みに激しく悶絶した。
「うぎゃあぁぁ――っ！」

アクメッドは陰核亀頭の付け根をグルリと環状に切り進み、性感覚器官のすべてを完璧に摘出できるように、同時に無関係な部分に可能な限り損傷を与えないように細心の注意を持って外科用メスを動かし続ける。陰核亀頭から続く白膜に包まれた勃起性組織を周囲から丁寧に剥離し、次に外科用メスから外科用鋏に持ち替え、その器官全体を恥骨上部に繋ぎ止めている陰核提靱帯を無造作に切断した。

室内に不気味な断裂音が響きわたった直後、ムスタフがピックの柄と小陰唇をさらに引っぱり上げると、バフィの快楽の源はズルッと体外へ引き出され、その肉根の二股に分かれた部分までもが露呈してしまう——性的な中枢器官が繊維組織に覆われた二本の細長い海綿体組織によって体に繋ぎ留められている様子があからさまに見てとれた。

「いやーっ！　もうやめてーっ！！　お…、お願いだから！！」

自分の享楽的なセックスライフがほとんど終わりかけていることと自覚したバフィが大声をあげて泣き喚く。

新米割礼師は三度外科用メスを取り上げる。それは先ほど使ったものとは違い、特殊な用途のためだけにデザインされた細くて、まっすぐな刀を有する特別製の外科用メスだった。要するに快楽器官を恥骨下部に繋げている陰核の根ともいうべき細長い勃起組織を、それを包みこむ筋組織の中から切り出すために使うものだった。

それを手にしたアクメッドは、激痛に喘ぐバフィを余所に、なんら躊躇することなく、二つに分岐して体内奥深く左右の恥骨弓へと根付いている薄い筋肉に覆われた陰核脚に沿って慎重に切り進めていった。外科用メスの細長い刃先が体の深い部分を抉る度に、西欧人女性が体をぶるぶると震わせ、苦鳴の叫びをあげる。同時に、ピックに引かれている陰核器官の自由度も増していく。

「ヴ$◇ガ※ア○&々——＊！　グ△ギ%♯ア□¥、————α！！」

無麻酔で行われる外科的手術と言っても間違いではないこの非道

な処置は、まさに地獄の責め苦だった——バフィは白目を剥いて、顔中を脂汗と涙、そして、涎でまみれさせ、獣の唸り声とも鳴き声ともつかぬ意味不明の叫声を発しながら体を細かく痙攣させていた。彼女は僅かに保たれている意識の片隅で、この現実とは思えないような苦痛によって気が狂わずに、未だに自分の精神が壊れていないことを不思議に思っていた。

アクメッドは手にしていた割礼具をやや細長い外科用鋏に持ち替えると、その先端部を血まみれの快楽器官が引き出されている切開部へと慎重に差し込んでいき、左側の肉根の一番奥まった部分に刃先をあてがう。それから、ゆっくりと閉じ合わせた——鈍い断裂を発して引き伸ばされていた肉根が勢いよく跳ね上がり、体外へと飛びでてくる。

さらに右側でも同様の作業を繰り返すと、その肉根を二本とも断ち切られてしまった陰核は、今や、白人女性の体に神経と血管のみで繋ぎ止められているだけの状態となっていて、その運命は風前の灯火だった。そして、獣じみた悲鳴を発し続けていたバフィは、すでに声を嗄らせてしまい、その身を小刻みに震わせ、荒い喘ぎを漏らしているだけだった。

そんな意識を朦朧とさせている女性ジャーナリストの顔をちらりと見上げた若い割礼師は野卑な笑みを浮かべると、かろうじて性的快楽の中枢器官を体に繋ぎ止めている陰核神経と血管に外科用鋏の開いた刃先をあてがった。それから、ムスタフの顔色を窺い、師匠がにやりと笑って頷くのを確認すると、最後の絆を断ち切るべく、それを挟んでいる刃を無造作に閉じ合わせた。

「ヴ♀仝α——ヽ！！」

その瞬間、床屋椅子にきつく縛められていたにもかかわらず、バフィの体が大きく跳ね上がる。すでに声を嗄らせてしまっているはずの喉から、彼女は断末魔の絶叫を迸らせる——股間から背中を経て頭に駆け上がる激痛は痛みという感覚を通り越して神経を焼き切るような衝撃で、目の前に幾千もの星が煌めいて、彼女の意識は完

全にまっ白となっていた。
　バフィの激しい痙攣が納まるのを待って、アクメッドはもう一方の陰核神経と血管も切断する。陰核が体から完全に切り離されると、ムスタフがピックを突き刺したまま、頭部に二枚の細長い羽根と末端部に二本の尻尾を持つ奇形種の芋虫ような肉片をゆっくりと持ち上げていく。そして、それらを損壊させないように慎重な手つきで二本のピックを取り外し、その西欧人女性の体から切り離されたばかりの陰核と小陰唇の一塊をトレイ上に置かれたエナメル皿の中に落とした。
　全身汗まみれのバフィは意識を失ったまま、荒い呼吸を繰り返していた。彼女にとっては幸いなことに、最初に行われた陰核神経の切断による激痛によって、そのまま気を失ってしまい、二度目のカットのときには、その苦痛を味わわずにすんでいた。
　アクメッドは陰核器官のすべてを摘出されてしまい、ぽっかりと開いてしまっている穴の中に残された血管を焼灼すると、その傷口を手術糸で素早く縫い合わせ、殺菌剤を満遍なく塗布した。それから、尿道カテーテルを引き抜いて、床屋椅子の前から離れた。そこへ入れ替わるようにして、ムスタフが立つ。
「おめぇの腕前、十分に見せてもらった。もう俺が教えてやれることぁは、なんもねぇな。おめぇ、もう店を構えてもええぞ」
　年老いた割礼師は、バフィの股間を覗き込みながら自分の愛弟子が行った陰核切除術の手際を褒め称え、見習い期間の修了を嬉しそうに告げた。そして、白人の女性ジャーナリストを床屋椅子に結びつけている革紐を解くように指示した。
「んじゃ、親方。あれ、俺がもらってもええかな？」
　バフィを縛りつけていた革紐を解きながら、アクメッドはトレイにあるエナメル皿を顎でしゃくって示した。若き割礼師は初めて自分の手だけで切り取った『もの』を今日の記念として手許へ残しておきたいと思ったのだ。
　理解ある師匠は、「そりゃもちろんええさ。おめぇが独り立ちし

た記念にするにゃ、ちょうどええんじゃねぇか！」と答えて、にやりと笑った。おそらく、その記念品は、弟子が割礼師を続けていくうえで、自己の技量を信ずる大きな支えとなるに違いなかった。

数か月後、バフィの傷は完全に癒えていた。しかし、抑えがたい性欲があるにもかかわらず、それを満たすことのできない、性的に不遇な人生を送らざるを得ないでいた。そして、自分が本当に体験することになった出来事を元に、新たな切り口で『女性器切除』に関する暴露記事を書くかどうかを悩み続けていた。

一方、ムスタフの店で助手を務めていたアクメッドも、今や、自分自身で床屋を営んでいた。その店の奥にある隠し部屋の棚には、彼が白人女性から獲得した記念品をアルコール漬けにしたガラスビンが大切に飾られていた。そのトロフィーはまだ一つだけだったが、彼は西欧人女性から『切り取ったもの』をもっと増やすつもりでいた。

（後書き）

この小説は海外の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ（女子割礼妄想）小説を翻訳したもので、原作は　ｘｘｘｒａｔｅｄｇｒｏｕｐｓ．ｃｏｍ　というアダルトSNSの　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　グループに投稿された　ｄｍｏｓｓ　２３６　氏による、„Ｂｕｆｆｙ'ｓ　ａ　ｄｒｙ　ｒｕｎ„です。タイトルは、単純に訳すと『バフィのリハーサル』となります。しかし、話の内容からすると若干ニュアンスが違うような気がします。„ｄｒｙ　ｒｕｎ„は『リハーサル』とか『予行演習』とかを意味しますが、この話の場合では『模擬演習』とするのがしっくりします。それで『バフィの疑似体験』としました。

あと、この作品、小陰唇や陰核を切り取るシーンの英文描写がなかなか秀逸で翻訳を進める励みにはなりました。やはり、この手の作品は、その部分がキモです。そのあたりをワンセンテンスだけで„ｃｌｉｔ　ｃｕｔ　ｏｆｆ„と簡単に流されてしまうと、ちょっと萎えます。

なお、ムスタフの弟子であるアクメッドは、原作では弟子ではなく、助手になっています。しかし、雰囲気的に助手よりは弟子の方がいいので、そういうふうに訳しました。また、じつは原作では彼に名前がありません。ですが、名前がないと日本文にしたとき「弟子」を連呼することになるので、勝手に『アクメッド』と命名させてもらいました。

ちなみに、この『アクメッド』という名前の出典は、別の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　小説である„Ａ　ｖｉｓｉｔ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｂａｒｂｅｒ„＝『理髪店への訪問』という話に登場する、エジプトで床屋を隠れ蓑にして女性割礼を行っている男の名前です。脳内補完的に同一人物ということにしました。その方が楽し

いので（笑）　いずれ、この作品も翻訳する予定ですので、乞う、ご期待です！